

一般の青少年と高齢者における万引きに関する心理的要因の検討

—世代によって万引きへの意識はどのように異なるのか—

大久保 智生・堀江 良英・松浦 隆夫
松永 祐二・宮前 淳子・宮前 義和
岡田 涼・七條 正典

<和文要約>

本研究の目的は、一般の青少年と高齢者における万引きに関する心理的要因の検討を行うことであった。香川県内の一般の青少年2090名と一般の高齢者213名が調査に参加した。まず、万引きの動機の語彙の因子分析を行った結果、「経済性」「誘発性」「自己中心性」の3因子が抽出された。次に、一般の青少年と高齢者の心理的要因について比較した結果、一般の青少年と高齢者とは万引きに関する心理的要因が異なっていた。最後に、心理的要因間の関連について検討した結果、青少年と高齢者では関連の仕方が一部異なっていた。以上の結果から、一般の青少年と高齢者に対しては、別の万引き防止の啓発が必要であることが明らかとなった。

キーワード：万引き、青少年、高齢者、心理的要因

問題と目的

近年、全国的に万引き犯罪が大きな社会問題となってきている。警察庁(2010)の統計上では青少年の万引きが最も多く、最近では高齢者の万引きの増加が指摘されていることから、一般の青少年と高齢者が万引きをどのようにとらえているのかという万引きに関する心理的要因について詳しく明らかにする必要がある。

万引きへの意識に関する研究は、Krasnovsky & Lane (1998)が万引きに関する研究をレビューするなど、海外では数多く行われている。日本では、近年、凶悪犯罪の鎮静化を受けて、凶悪犯罪に至る可能性のあるゲートウェ

イ犯罪としての万引き犯罪に関心が集まってきており、研究も増加してきている。ただし、日本では万引きは初発型非行と呼ばれ(高橋, 1999)、青少年の犯罪というイメージが強いことから万引きに関する研究は青少年を対象としたものが多くなっている。

青少年を対象とした研究の中でも、特に一般の青少年の万引きに関する心理的要因に焦点を当てた研究は数多く行われている。例えば、中学生を対象とした上野・中村・本多・麦島(2009)の研究や大学生を対象とした永岡(2003)の研究や小中高生を対象とした全国万引犯罪防止機構(2010)の研究などがある。しかし、小学生

大久保智生・宮前 淳子・宮前 義和・岡田 涼・七條 正典 香川大学教育学部
堀江 良英 香川県警察本部生活安全企画課
松浦 隆夫 香川県警察本部少年課
松永 祐二 香川県警察本部総務課

から20歳未満の大学生までの青少年としての万引きに関する心理的要因については明らかにされておらず、一般の青少年の万引きに関する心理的要因について検討する必要がある。

これに対し、高齢者に関する研究は、非常に数が少ないのが現状である。高齢者の万引きに焦点を当てた研究では、山崎・細江(2011)の研究が挙げられる。ただし、山崎・細江(2011)の研究はフィールドワークであり、系統だった量的な研究は行われていない。近年、高齢者の万引きの認知件数が増加していることが指摘されているが、高齢者の数も増加していることや高齢者は取り締りやすいことの影響もあり、その真偽は定かではない。しかし、高齢者の万引きに関する心理的要因を扱った研究は少なく、高齢者がどのように万引きについてとらえているのかについて明らかにされていないことは確かである。したがって、高齢者についても万引きに対してどのようにとらえているのかという万引きに関する心理的要因について明らかにする必要がある。

さて、万引き犯罪は、香川県においても社会問題になっており、人口1000人当たりの万引きの認知件数が2009年まで7年連続全国ワースト1位であることから、万引き犯罪の防止が喫緊の課題となっている(大久保, 2012)。こうした中、香川県警と香川大学の共同事業として子ども安全・安心万引き防止対策事業が立ち上がり、県内の万引きの実態を把握し、その要因を探り、防止対策を策定するために調査を行うこととなった。大久保・堀江・松浦・松永・江村(印刷中)では、香川県内の万引きの被疑者を対象に意識調査を行い、青少年や高齢者によって万引きに関する心理的要因は異なることを明らかにしている。また、大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡(2012)では、家族などの周囲の人間の反応が万引きの抑止となることを示している。ただし、これらの調査では一般の青少年や高齢者の万引きに関する心理的要因については検討されていないため、今回の調査では一般の青少年や高齢者の万引きに関する心理的要因について検討を行うこととする。

万引きに関する心理的要因としては、大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡(2012)の研究に倣い、万引きに関する規範意識、万引きの動機の語彙、万引きした際の家族の反応の推測、万引きした際の友人の反応の推測に注目する。万引きに関する規範意識については、大久保ら(大久保, 2012; 大久保・堀江・松浦・松永・江村, 印刷中)の研究で特に欠如してないことが明らかにされている。しかし、近年の万引き防止対策では規範意識の醸成がスローガンになっていることから、規範意識に注目し、被疑者を対象とした調査と同じ項目を用いて検討する。また、万引きの動機については、動機をどのように理解しているのかという意味で動機の語彙(Mills, 1940)に注目する。被疑者に対しては万引きをした動機を尋ねたが、一般青少年や高齢者は実際に万引きをしていないため、一般青少年や高齢者に対しては、万引きをする者がどのような動機で万引きをしていると思うのかを尋ねることとする。動機の語彙とは、行動を理解・納得するための「合言葉」であり(大久保, 2008, 2011)、これを調べることで、一般の青少年や高齢者が万引きについてどのような動機に基づいて理解しているのかを検討することが可能になるといえる。また、大久保・加藤(2010)の研究で動機の語彙と実際の行動との関連も明らかになっているように、犯罪への意識を探るのに重要な概念であるといえる。万引きした際の家族や友人の反応の推測については、もし万引きをした場合、家族や友人がどのような反応をすると思うかに焦点を当てる。こうした万引きに関する心理的要因は、被疑者の青少年と高齢者では万引きの特徴が異なる(大久保・堀江・松浦・松永・江村, 印刷中; 大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡, 2012; 皿谷・三阪・濱本・平, 2011)ことから、一般の青少年と高齢者では異なることが予測される。したがって、本研究では、世代によって万引きに関する心理的要因が異なるのかを検討する。

また、万引きに関する心理的要因間の関連が世代によってどのように異なるのかを検討する

ため、被疑者を対象とした大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡(2012)の研究と同様に、家族および友人関係と攻撃性が万引きの動機や規範意識、万引き後の心理状態に及ぼす影響について世代別に検討することとする。したがって、大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡(2012)の研究と同様に、家族や友人との関係性がどのように万引きの心理的要因に関連しているのかを検討する。加えて、個人の特性としての攻撃性が万引きの心理的要因に関連しているのかも検討する。

以上を踏まえ、本研究では香川県内の一般の青少年と高齢者を対象として、万引きに関する心理的要因について検討することを目的とする。具体的には、まず、動機の語彙については、これまで行ってきた研究とは別の構成概念であるため、因子分析を行い、尺度の検討を行う。次に、一般の青少年と高齢者において、万引きに関する心理的要因について比較を行う。最後に、青少年と高齢者の万引きに関する心理的要因間の関連について比較を行う。

方法

調査対象と手続き

一般の青少年は香川県内の2090名を対象に無記名で調査を実施した。学校段階の内訳は、小学5年生374名(男性170名、女性204名)、中学2年生573名(男性299名、女性273名、不明1名)、高校2年生739名(男性350名、女性387名、不明2名)、20歳未満の大学・専門学校生404名(男性182名、女性213名、不明9名)であった。一般の高齢者は香川県内の213名(男性86名、女性127名)を対象に無記名で調査を実施した。年齢の内訳は、60代60名、70代110名、80代42名、不明1名であった。

調査用紙の回収に際しては、一人ひとりに封筒を渡し、その中に回答済みの質問紙を入れ、封を閉じてもらった。これにより、回答内容が他の人間に見られないようにし、個人の不利益とならないように配慮した。

調査内容

①万引きに関する規範意識：万引きに関する

規範意識については、「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会(2009)の調査を参考に、大久保・堀江・松浦・松永・江村(印刷中)が作成した尺度を使用した。尺度は、「万引きは悪いことである」、「万引きくらいなら問題ない(逆転項目)」、「万引きしても処罰はたいしたことがない(逆転項目)」、「つかまっても弁償すれば許される(逆転項目)」の4項目で構成されており、4項目の合計を項目数で割り、「万引きに関する規範意識」得点とした。回答形式は、「あてはまらない」(1点)「どちらともいえない」(2点)「あてはまる」(3点)の3件法である。

②万引きの動機の語彙：万引きの動機の語彙については、古山(1986)の調査や田中・田中(1996)の調査や大久保・加藤(2006)の調査などを参考に、大久保・堀江・松浦・松永・江村(印刷中)が作成した尺度を使用した。教示は青少年では、小学生の場合には「小学生はどんな理由で万引きをしますか」とし、中学生、高校生、大学生の場合には小学生の部分中学生、高校生、大学生に変えて行った。高齢者では「高齢者はどんな理由で万引きをしますか」と教示した。尺度は、「スリルがあるから」、「お金を持っているが使いたくないから」、「でき心から」、「誘われたから」、「万引きはたいしたことではないから」、「イライラしていたから」、「万引きされる店が悪いから」、「お金に余裕がないから」、「どうしても欲しかったから」、「寂しかったから」の10項目で構成されている。回答形式は、「あてはまらない」(1点)「どちらともいえない」(2点)「あてはまる」(3点)の3件法である。

③万引きした際に予想される家族の反応：もし万引きしたら、家族はどう思うかについては、大久保・堀江・松浦・松永・江村(印刷中)が作成した家族の否定的反応の推測尺度を使用した。尺度は、「驚く」、「悲しむ」、「怒る」、「困る」の4項目で構成されており、4項目の合計を項目数で割り、「家族の否定的反応の推測」得点とした。回答形式は、「あてはまらない」(1点)「どちらともいえない」(2点)「あ

てはまる」(3点)の3件法である。

④家族との関係性：家族との関係性については、大久保・加藤(2006)の調査などを参考に作成した家族との関係性尺度3項目を使用した。尺度は、「家族は気にかけてくれる」、「家族に必要とされている」、「家族は困ったことがあると助けてくれる」の3項目で構成されている。3項目の合計を項目数で割り、「家族との関係性」得点とした。回答形式は、「あてはまらない」(1点)「どちらともいえない」(2点)「あてはまる」(3点)の3件法である。

⑤万引きした際に予想される友人の反応：もし万引きしたら、友人はどう思うかについては、大久保・堀江・松浦・松永・江村(印刷中)が作成した友人の否定的反応の推測尺度を使用した。尺度は、「驚く」、「悲しむ」、「怒る」、「怖がる」、「困る」の5項目で構成されており、5項目の合計を項目数で割り、「友人の否定的反応の推測」得点とした。回答形式は、「あてはまらない」(1点)「どちらともいえない」(2点)「あてはまる」(3点)の3件法である。

⑥友人との関係性：友人との関係性については、大久保・青柳(2004)の調査などを参考に作成した友人との関係性尺度3項目を使用した。尺度は、「友人は気にかけてくれる」、「友人に必要とされている」、「友人は困ったことがあると助けてくれる」の3項目で構成されている。3項目の合計を項目数で割り、「友人との関係性」得点とした。回答形式は、「あてはまらない」(1点)「どちらともいえない」(2点)「あてはまる」(3点)の3件法である。

⑦攻撃性：攻撃性については、安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井(1999)の尺度のうち、「短気」、「敵意」尺度計6項目を使用した。短気は「かっとなることを抑えるのが難しいときがある」、「ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる」、「いらいらしていると、すぐ顔に出る」の3項目、敵意は「友人の中には私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない」、「私を嫌っている人は結構いると思う」、「陰で人から笑われているように思うことがある」の3項目で構成されている。それぞ

れの合計を項目数で割り、「短気」、「敵意」得点とした。回答形式は、「あてはまらない」(1点)「どちらともいえない」(2点)「あてはまる」(3点)の3件法である。

結果と考察

動機の語彙尺度の検討

今回作成した万引きの動機の語彙10項目に対して因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、3因子10項目を採用した。その結果をTable 1に示す。第1因子は「お金に余裕がないから」、「どうしても欲しかったから」、「お金を持っているが使いたくないから」などの項目からなっているので「経済性」と解釈した。第2因子は「スリルがあるから」、「でき心から」、「誘われたから」、「万引きはたいしたことではないから」などの項目からなっているので「誘発性」と解釈した。第3因子は「寂しかったから」、「イライラしてたから」、「万引きされる店が悪いから」などの項目からなっているので「自己中心性」と解釈した。

本研究で得られた3因子は、同じ項目で因子分析を行った大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡(2012)の研究で得られた因子とも類似していた。したがって、万引き被疑者の動機と一般の青少年と高齢者が納得・理解する万引きの動機とはある程度枠組みは共通するものといえる。

なお、各因子に含まれる項目の得点を合計して項目数で割り、それぞれ「経済性」得点、「誘発性」得点、「自己中心性」得点とした。

青少年と高齢者の万引きの心理的要因の比較

青少年と高齢者の万引きに関する心理的要因が異なるのかを検討するため、世代(青少年、高齢者)を独立変数としたt検定を行った。その結果をTable 2に示す。

万引きに関する規範意識($t=1.478$, $df=2279$, $n.s.$)では2群間に有意差が認められなかった。このことから、青少年と高齢者では規範意識に差がないことが明らかとなった。一般の青少年の規範意識の低下が叫ばれているが、万引きに関する規範意識は高齢者と比べて特に低下して

Table 1 万引きの動機の語彙の因子分析結果

〈項目〉	I	II	III
I 経済性			
お金の余裕がないから	.834	-.067	-.015
どうしても欲しかったから	.699	.020	-.006
お金を持っているが使いたくないから	.388	.143	.049
II 誘発性			
スリルがあるから	-.090	.714	-.033
でき心から	.079	.636	-.028
誘われたから	.057	.587	.019
万引きはたいしたことではないから	.025	.370	.215
III 自己中心性			
寂しかったから	-.103	.009	.661
イライラしていたから	.076	-.036	.629
万引きされる店が悪いから	.073	.029	.349
因子間相関	I	II	
	II	.538	
	III	.434	.624

Table 2 青少年と高齢者の万引きに関する心理的要因の平均値とt検定結果

	青少年 N = 2090	高齢者 N = 213	t 値
万引きに関する規範意識	2.736 (.335)	2.698 (.463)	1.478
動機の語彙「経済性」	2.303 (.614)	1.820 (.692)	10.287 ***
動機の語彙「誘発性」	2.107 (.578)	1.666 (.539)	10.070 ***
動機の語彙「自己中心性」	1.596 (.512)	1.621 (.577)	.637
家族の否定的反応の推測	2.771 (.343)	2.862 (.349)	3.550 ***
家族との関係性	2.663 (.460)	2.920 (.272)	7.823 ***
友人の否定的反応の推測	2.257 (.466)	2.673 (.427)	12.219 ***
友人との関係性	2.571 (.475)	2.760 (.396)	5.552 ***
攻撃性「短気」	1.901 (.623)	1.726 (.618)	3.774 ***
攻撃性「敵意」	2.079 (.600)	1.678 (.586)	9.018 ***

カッコ内は標準偏差

***p < .001

いないといえる。また、青少年も高齢者も規範意識は高いことが明らかとなった。

万引きの動機の語彙では、「経済性」(t = 10.287, df = 2264, p < .001)、「誘発性」(t = 10.070, df = 2256, p < .001)において、青少年が高齢者よりも有意に得点が高かった。「自己中心性」(t = .637, df = 2251, n.s.)においては、2群間に有意差が認められなかった。以上の結果から、青少年は経済的な動機や誘発的な動機から万引きをしやすいと考えていることが明らかとなった。したがって、青少年は経済的な動機や誘発的な動機の語彙から、万引きを理解しているといえる。大久保・堀江・松浦・松永・江

村・永富・時岡(2012)の研究では、青少年は経済的な動機で万引きをしやすいたことが明らかとなっていることから、一般の青少年の動機理解は現実とある程度一致しているといえる。「さびしかったから」、「イライラしていたから」など自己中心的な動機は、青少年も高齢者も違いは認められなかったが、高齢者は社会的孤立による寂しさなどから万引きをすることが明らかとなっていることから、青少年と同じくらいの値になっているのかもしれない。このように、万引きの動機の語彙は世代ごとに異なっていた。

家族の否定的反応の推測 (t = 3.550, df = 2272,

$p < .001$) では、高齢者が青少年よりも有意に得点が高かった。このことから、高齢者の方が青少年よりも万引きした際に家族に否定的反応をされると考えていることが明らかとなった。青少年の万引きは許容する風潮も社会の一部にはあるため、高齢者の方が万引きに対する家族の反応が否定的となっている可能性がある。

家族との関係性 ($t = 7.823, df = 2286, p < .001$) では、高齢者が青少年よりも有意に得点が高かった。このことから、高齢者の方が青少年よりも家族との関係が良好であることが明らかとなった。被疑者の高齢者は独居の者が多かったが、一般の高齢者では家族と良好な関係を築いていることが推測される。

友人の否定的反応の推測 ($t = 12.219, df = 2278, p < .001$) では、高齢者が青少年よりも有意に得点が高かった。このことから、高齢者のほうが青少年よりも万引きした際に友人に否定的な反応をされると考えていることが明らかとなった。大久保・堀江・松浦・松永・江村(印刷中)の研究で示唆されているように、青少年の万引きは共犯がいることが多く、友人の影響が強いことから、一般の青少年においても否定的反応が低くなったと考えられる。

友人との関係性 ($t = 5.552, df = 2289, p < .001$) では、高齢者が青少年よりも有意に得点が高かった。このことから、高齢者のほうが青少年よりも良好な友人との関係が良好であることが明らかとなった。ただし、本研究に参加した高齢者は、社会的に孤立せずに、地域社会ともつながっている者が多かったこともこの結果に影響している可能性がある。

攻撃性では、短気 ($t = 3.774, df = 2267, p < .001$) において、青少年が高齢者よりも有意に得点が高かった。敵意 ($t = 9.018, df = 2271, p < .001$) において、青少年が高齢者よりも有意に得点が高かった。このことから、青少年のほうが高齢者よりも攻撃性が強いといえる。近年、高齢者の攻撃性の高さなどが叫ばれているが、一般の高齢者では青少年ほどは高くないといえる。

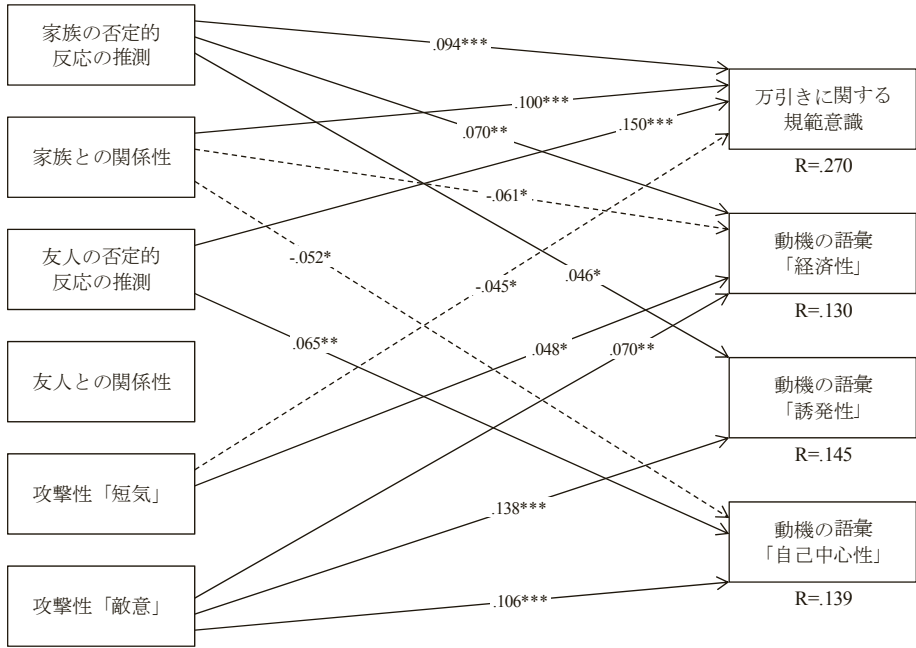
青少年と高齢者の万引きの心理的要因間の関連の比較

家族および友人関係と攻撃性が万引きに関する規範意識と万引きの動機の語彙に及ぼす影響を検討するために、青少年と高齢者を異なる母集団とする多母集団同時分析によるパス解析を行った。家族の否定的反応の推測、家族との関係性、友人の否定的反応の推測、友人との関係性、短気、敵意の6変数を説明変数、万引きに関する規範意識と万引きの動機の語彙(経済性、誘発性、自己中心性)を目的変数とした。すべての変数間にパスもしくは共分散を想定する飽和モデルを設定した。分析には尺度得点を用い、パラメータの推定は最尤推定法を用いた。

まず、母集団間でパス係数と共分散に等値制約を置かないモデルでパラメータを推定した。その結果、友人の否定的反応の推測から万引きに関する規範意識に対するパスと友人との関係性から万引きに関する規範意識に対するパス、説明変数間の9つの共分散、目的変数間の3つの共分散に有意な差がみられた。そこで、これらのパスと共分散以外のパスと共分散に等値制約を置いたモデルを検討した。その結果、適合度について、 χ^2 値は有意であったものの ($\chi^2 = 53.041, df = 31, p < .01$)、CFI = .993、RMSEA = .018と十分な値を示したため、このモデルを採択した。青少年の結果をFigure 1に、高齢者の結果をFigure 2に示す。

万引きに関する規範意識に対しては、青少年と高齢者のいずれにおいても、家族の否定的反応の推測 ($\beta = .094, .073, p < .001$)、家族との関係性 ($\beta = .100, .044, p < .001$) から有意な正のパス、短気 ($\beta = -.045, -.033, p < .05$) から有意な負のパスがみられた。家族からの否定的な反応を推測したり、家族とよい関係を築いていることが、青少年と高齢者の万引きに対する規範意識の高さにつながるといえる。一方で、個人特性として短気である青少年や高齢者は、規範意識が低くなるといえる。また、友人の否定的反応の推測 ($z = 4.038, p < .001$) と友人との関係性 ($z = 2.234, p < .05$) からのパスについては青少年と高齢者で有意な差がみられた。友

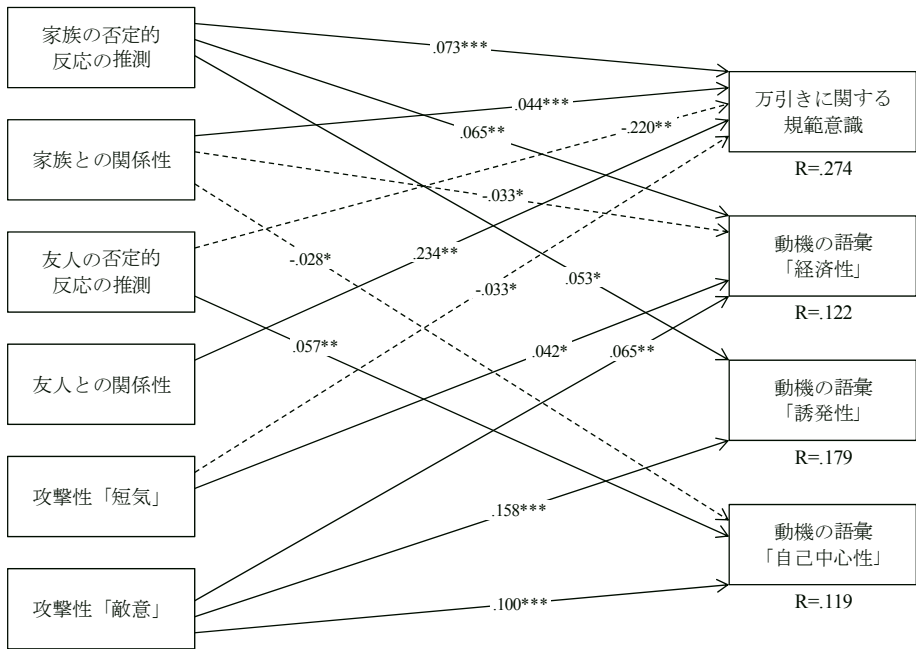
一般の青少年と高齢者における万引きに関する心理的要因の検討



注. 有意ではなかったパスと変数間の共分散は省略した。正の値を示したパスを実線、負の値を示したパスを点線で示す。

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Figure 1 青少年における万引きの心理的要因間の関連についてのパス解析結果



注. 有意ではなかったパスと変数間の共分散は省略した。正の値を示したパスを実線、負の値を示したパスを点線で示す。

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

Figure 2 高齢者における万引きの心理的要因間の関連についてのパス解析結果

人の否定的反応の推測からのパスは、青少年では有意な正の値を示し($\beta = .150, p < .001$)、高齢者では負の値を示した($\beta = -.220, p < .01$)。青少年においては、友人からの否定的な反応を推測することが、万引きに対する規範意識を高めているといえる。青年期においては、友人からの否定的な評価に過敏になりやすいため(岡田, 1995; 上野・上瀬・松井・福富, 1994)、友人が否定的に反応することが推測される場合に、万引きをよくないものと捉えるようになるものと考えられる。一方、高齢者では、友人からの否定的反応を推測しないほど、万引きに対する規範意識が高いことが示された。高齢者においては、友人関係の幅は狭くなり、特定の限られた友人との親密な関係が重要となる(Carstensen, 1995)。そのため、もし仮に自分が万引きをしたとしても、否定的に反応せずに受け止めてくれる友人がいると感じている高齢者は、万引きをよくないものとする規範意識が高くもつものと考えられる。友人との関係性からのパスは、青少年では有意な値を示さず($\beta = -.012, n.s.$)、高齢者でのみ有意な正の値を示した($\beta = .234, p < .01$)。高齢者においては、自分を気にかけてくれる受容的な友人の存在が、規範意識を高めているものと考えられる。

動機の語彙「経済性」に対しては、青少年と高齢者のいずれにおいても、家族の否定的反応($\beta = .070, .065, p < .01$)、短気($\beta = .048, .042, p < .05$)、敵意($\beta = .070, .065, p < .01$)から有意な正のパス、家族との関係性($\beta = -.061, -.033, p < .05$)から有意な負のパスがみられた。いずれの年齢段階においても、家族が否定的に反応すると推測するほど、万引きが経済的な理由から行われると理解しているといえる。また、個人特性として短気や敵意が高い青少年や高齢者は、経済的な理由から万引きをとらえているといえる。一方で、家族との関係が良好な場合には、経済的な理由から万引きをとらえていないことも示された。

動機の語彙「誘発性」に対しては、青少年と高齢者のいずれにおいても、家族の否定的反応の推測($\beta = .046, .053, p < .05$)と敵意($\beta = .138,$

$.158, p < .001$)から有意な正のパスがみられた。いずれの年齢段階においても、家族が否定的に反応すると推測するほど、また個人特性としての敵意が高いほど、スリルやでき心などの誘発的な理由から万引きを理解しているといえる。動機の語彙「自己中心性」に対しては、青少年と高齢者のいずれにおいても、友人の否定的反応の推測($\beta = .065, .057, p < .01$)と敵意($\beta = .106, .100, p < .001$)から有意な正のパス、家族との関係性($\beta = -.052, -.028, p < .05$)から有意な負のパスがみられた。いずれの年齢段階においても、友人が否定的に反応すると推測するほど、また個人特性としての敵意が高いほど、自分の寂しさや店側の不備といった自己中心的な理由から万引きを理解しているといえる。一方で、家族との関係性が良好な場合には、自己中心的な理由から万引きをとらえていないことも示された。

まとめと今後の課題

本研究の目的は、香川県内の一般の青少年と高齢者を対象として、万引きの心理的要因について検討することであった。まず、動機の語彙について因子分析を行ったところ、先行研究と類似した「経済性」、「誘発性」、「自己中心性」の3因子が抽出された。次に、一般の青少年と高齢者の万引きに関する心理的要因について比較したところ、一般の青少年と高齢者とは万引きに関する心理的要因が異なっていた。最後に、心理的要因間の関連について検討したところ、青少年と高齢者では一部、関連の仕方が異なっていた。したがって、一般の青少年と高齢者とは、対策の仕方を変える必要性が示唆された。

一般の青少年と高齢者の動機の語彙については、大久保・堀江・松浦・松永・永富・時岡(2012)の研究で示された被疑者の動機と類似した因子が得られた。動機の理解の仕方である動機の語彙と被疑者の実際の動機が類似していたことから、万引きをしない一般の青少年や高齢者と万引きをした被疑者は動機のとらえ方は類似しているといえる。個人の動機のとらえ方は社会の動機のとらえ方の反映であるという

Mills (1940) の動機論 (大久保, 2011) を支持する結果といえる。

心理的要因間の比較については、一般の青少年と高齢者で違いが認められた。動機の語彙や家族や友人の反応の推測なども世代によって異なっており、こうした世代間の意識の違いを考慮して対策をする必要があるだろう。ただし、万引きに関する規範意識については、差がなく、一般の青少年も高齢者も非常に高いことが明らかとなった。被疑者の規範意識も高く、一般の青少年や高齢者の規範意識も高いことから、単純に青少年の規範意識の低下や高齢者の規範意識の低下を万引きの原因として考えるのは困難であろう。個人の規範意識の低下のような単純な図式に落とさず、万引きしにくい店作りや地域づくりなど社会全体で対策を考えていく必要があるだろう。

心理的要因間の関連については、一般の青少年と高齢者とで関連の仕方が類似していたが、特に、友人関係の規範意識への影響において違いが認められた。青少年では、友人の否定的反応を推測するほど規範意識が高くなっていたが、高齢者では否定的反応を推測するほど規範意識が低くなり、友人関係が良好なほど規範意識が高くなっていた。このことから、青少年では万引きを許さない友人関係が重要になるが、高齢者では、受容的な友人関係が重要になるといえる。したがって、世代によって、万引き防止における友人関係のあり方が異なることから、人間関係作りという対策を立てる場合でも、それぞれの世代の特徴を踏まえて考えていく必要があるだろう。

本研究の結果から、一般の青少年や高齢者向けの今後の万引き防止対策への示唆について考えると、青少年と高齢者とでは万引きのとらえ方が異なることから、異なる万引き防止の啓発や教育が必要になるだろう。青少年では万引きを許さない友人関係作りが重要になるが、高齢者では受容的な友人関係作りが重要になるように、世代の特徴を踏まえた万引き防止の啓発や教育が求められるだろう。加えて、対策においては、友人との関係や家族との関係だけでな

く、地域との関係など視野を広げていく必要があるといえる。

今後は、香川県子ども安全・安心万引き防止対策事業では、被疑者調査とほぼ同様の調査項目で一般の青少年および高齢者の意識調査を行っていることから、万引きの被疑者と一般の青少年や高齢者の万引きに関する心理的要因の比較を行う必要があるだろう。こうした比較を通して、万引きを取り巻く社会の意識についても明らかにした上で、結論ありきの対策ではなく、データに基づいて多角的に万引き対策を行っていく必要があるといえる。最後に、万引き防止に本気で取り組むのならば、万引きを指導や援助のチャンスとしてとらえるくらいの発想の転換も視野に入れ、地域ぐるみで対策を立てていく必要があるだろう。

引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 1999 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Carstensen, L. L. 1995 Evidence for a life-span theory of socioemotional selectivity. *Current Directions in Psychological Science*, 4, 151-156.
- 警察庁 2010 平成21年の犯罪情勢
- 古山正幸 1986 非行少年の規範意識について：万引き, 自転車・オートバイ盗少年の規範意識を中心に 刑政, 97, 32-42.
- Krasnovsky, T. & Lane, R. C. 1998 Shoplifting: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 3, 219-235.
- 「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会 2009 万引きに関する調査研究報告書
- Mills, C. W. 1940 Situated actions and vocabularies of motive. *American Sociological Review*, 5, 904-913.
- 永岡理香 2003 万引きを規定する要因の検討 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 58, 185-196.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友

- 人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 大久保智生 2008 動機の語彙が増える青年期 都筑学(編) やさしい発達心理学 ナカニシヤ出版 Pp.217-231
- 大久保智生 2011 動機は社会を映す鏡である 夏堀睦・加藤弘通(編) ひとつ上をいく卒論・修論を書くための心理学理論ガイドブック ナカニシヤ出版 Pp.147-158.
- 大久保智生 2012 青少年の万引きに対する規範意識：香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.
- 大久保智生・青柳肇 2004 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本福祉教育専門学校研究紀要, 12, 9-15.
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀 印刷中 万引きに関する心理的要因の検討：万引き被疑者を対象とした意識調査から 科学警察研究所報告
- 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀・永富太一・時岡晴美 2012 万引き被疑者における万引きに関する心理的要因間の関連の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きの心理に及ぼす影響 子育て研究, 2, 13-20.
- 大久保智生・加藤弘通 2006 中学生はどのように問題行動を正当化しているのか？：中学生の問題行動の動機に関する研究 季刊社会安全, 61, 17-30.
- 大久保智生・加藤弘通 2010 中学生の問題行動とその動機の語彙との関連：中和化の技術に注目して 香川大学教育学部研究報告, 134, 1-12.
- 皿谷陽子・三阪梨紗・濱本有希・平伸二 2011 万引き被害者の特徴に関する質問紙調査 福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 45-52.
- 高橋良彰 1999 新犯罪社会心理学 学文社
- 田中純夫・田中奈緒子 1996 万引きで補導・検挙された少年の生活意識と犯行時の意識 犯罪心理学研究, 34, 1-16.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 上野行良・中村晋介・本多潤子・麦島剛 2009 中学生の万引き行為に関連する要因 福岡県立大学心理臨床研究, 1, 67-73.
- 山崎剛信・細江達郎 2011 増加する高齢者の万引きの実態とその対策 岩手フィールドワークモノグラフ, 13, 1-12.
- 全国万引犯罪防止機構 2010 万引きに関する全国青少年意識調査・分析報告書